

911.3

X
元豐

江
晉
錄
集
禮



滑稽銘錄集卷之三

尾陽沙門 馬州 撰

尾張

熱田宿

雪亭記

鶴羽城

化光

蒸々然、紙嘗々い水と能くもおれて、も中に
まきのあこあくと徳初より二十歩計
我の家はくるしむ机のすゝみ庭と月影
ありてかうむがよめぬたるを一間ゆゆく

東夷と極て大本根作のれども風と
凌ぐる勞服あらむ家もて獨楽のトヨミ
シロギ唐衣わが古くと並ひ威ハ服とをのれど
我ニ耳と邊林乃るよりとて當まればかく
巧じゆき行とも北のうみをとて不思ふよしと
物いあらんへと鶴す連船の往來とすやよ
人ふもはの海をめ利欲乃はほり堅く
據ひたりとあり

まわれと雪れぬいやほのも

梅うるゑし骨とおせく御み爲め化光
手のゆよ多めにうつせま
彰は仰もゆく有ゆればあらう
塔はくい難て爲くやの度のれ 無爲
空うり生うづと風の空うすれ 拾翠

佐屋驛

鳴風館
吟山

猫のゑあ締れ雲よかくうり
石女シラヒズメ乃出せうる根井ルネイこれ

九月九日重陽
唐松軒輕加
九月九日重陽
唐松軒輕加
九月九日重陽
唐松軒輕加
九月九日重陽
唐松軒輕加
九月九日重陽
唐松軒輕加

津島郷

浪月舎

居りしる伊豫に行かや東野
叶勝女院もひととまくら
人もよそひもあらず御辻宮
紙をすれせ様の丸ひどく家
おびきうくるは、風や風中 一向齋
殊故鳥たゞや至高の塵埃
道をやさい若かりし生れ兎
山にゆゑ工ともててむ林野
つむぎと枝の拂ひて梅の紀 郡ト堂
伊豫熊野経のりや郭トム
年三歳の華とそ一季その
子宮より布が爲ふかや實なる
もの葉り地やの葉乳木危幽麓下
のゆく事も、實はねむやる土指
生のれをすとせんや仙うなむ
まぐみとすとせんや山の傳

刈安賀郷

大蛇丸記

月空庵

露川

今繡胡りやく尾崎の乾もと年又里
ひて刈安がては田とよて
五穀豊年あよぼうとすとよた河
本林と傳て水ある年とぞ役の東
町の民もおもく芳きゆくや省より
此邑よ風人絶ふらうとくとくとく風を
門と至るおほれにね屋とくとく
門と至るおほれにね屋とくとく

あいと柳一因する朋と携ひ乍
甲寅の日例よ一宇が体で大蛇丸と
号し農業商賣の暇とくつて富よ金と
手にしつと思ふとち終中の食事
滑稽のよとすとくわ稚地の口子
かづくらうふ靈蛇らしき

奇雲亭記

八雷

星子起みテ外と食ハ及ばずやまと
居ち勝と富むことわの葉のもと

往々見ゆ一九十九夜物のことを教つるよ
とおはなは防ぐぞうとあはて奇雲をと
ねと塵里とほざくとおはておはての御と
ある宿山川万里と二月のれす浦か
詠歌志野のむもあはてと科塘城北月と
沙門寺とあはてと沙門寺と御成河
出ゆる人あ禽獸なり日一毛地の古役
あはてとばらけたれ住ゆるがくやとおもと
放下してあはてと賀難にゆる

肇の葉や口乃月休まつやめと
竹箇國膳よゆくやめ士・捐
後中と音無がりくとや處子地と
新法師の内と地と地とや蜜と
蜜と蜜と蜜と蜜と蜜と蜜と

附合

生身の途トシル井のよ

古井戸此舟と埋み重元重安
海あひ水あひ水あひとと水原八雷

程の穿丸れ奉る所乃と水原

元のれまゆのまくは小ち月
體成りゆきゆきゆきたまつま

八宿

寢劍とほんよりて一たのむに 万化
至るゆきゆきゆきゆきゆきゆき
二日うち經營おゆく内ヤアシル
化として味を往かせや室乃持
古のあわす色にさやかに蝶 木旦
足に重ねる肩をひれや卒懺

鳥月やぬりとれし一年の経
夕はの千ちうや海へりうる尾
李麻浦ノナテのびらる揚天莊
一日うち佐和人やか
紳りしよれおもひゆや壁
室ふや燈うらぎの夜乃も

天舌

附合

神 儒 佛 三教 翠葦の妻

密玉れ延べ月の月上に

泉水めりぬへとひたゞく

天舌

東と角を廻り百日は草に抱星
のまへゆれよすか声より附も
船車は双そそくや強ふ山
宮舟をもれ氣にせばれんと
神通り一十要からむ難うか
日中にはや眼はれまじるほど
絶膳のまゝせ界やむ母草

桃也

初嘗て紙ふか行りりのむ
波泡とてくらまか柳いれ
須眉刈りきり也か新村龜
曰一毛よるすも浮きや衰の雪
稚子やちりや相結ひしや 不天
日のやうもひりやうもひりやうも
玉のやうもひりやうもひりやうも
生贋よおづくらひや本丸ひれ 東虹

貞凌

吟松
尾
新法師
冕耳
遊濟

附合

我却入於仙鄉
而至太極門
天地萬象
無不具足
此乃霍亂
指所

大川引てあまくよしより水仙む　旭川
年月の傍おをそひゆるの阿セイ井元
名夕も生れ流轉乃小多聞タム人ヒト槐野
同諸君集大蛇樓卒賦　仙源亭　桃也

蘿月松風避俗塵，詞花簇簇滑嵇人。
乾坤此會多幽興，誰識樓中別有春。

題大蛇丸

谷村氏秀實

不現_セ鄆門_ノ妖_ヲ蒙_シ漢祖_ヲ屠_フ化城_ヲ一_レ方_ノ

金金三

九

吟松
行也行也行也行也行也行也

尾一脉也。但此之風氣

新法師 うしろとあらわしや絶句
刀尾耳

萬物此行多矣如晦也如龜

至泊寒風冷
夜泊湖煙暮
遊沂

附合

我亦不欲爲神仙也

馬車と捨てて駆けた。ひ

及此砂比之烟乃霍乱皆

天橋立賦

探梅舍

可ト

えああああ丹波の山元の橋をさとすと
ひとりりりてそ奴乃は風太里と南北より
二十步ばかりすかも一里よほつとと海と
あまの虹の晴空をかきほりみ
白波渺々としてすとまわりしきび
奈良坂ちやうよりくらべよれは還て壁を
りあてて鳴まれぬ神をとて終て支那の
古屋不九世の跡と鼻がなせと窓清れ

形よほりりて小鳥うごくはばはひて
ふふふ乃事はひよそりねとくに風の
渓村跡とて御内均とゆくと屏風
ゆうゆう事の風情をすりあてて
もはははははははははははははははは
育やれどねのねのねのねのねのねのね
おおはははははははははははははははは
おおはははははははははははははははは

おおははははははははははははははは
おおははははははははははははははは
おおははははははははははははははは
おおははははははははははははははは

嚴様さへはるに當んてチヌモノ可ト
河音一も指人形と呼べり
うふれ御れあやゆめあたはし里
候多書のせよとくを安一層の豪

附合

樹木の風が近い柳の
化生の山 坡 可ト

狼星の血脈押さざり
性根と拂ふ立教を照

水のゆゑの、涙と涙

十句表

脂身や身の包乃千世界

遼月

まくと筆く夜聲の室 吟松

辛在と辛空ノ接声あり 可ト

境乃我と近づくも

八雷

内くよ風羽きくわむての木

桃也

心身よりのあひじり

木旦

すぬきにむり、てすくねりと抱星

ほの門をぬる元氣のやさ 東虹

たるく精とらはせふ十日 万化

なれあらわなるものまめ 遊游

佐布里呂

山猫も陰と安らぎりまゆる 甫邑
遙と少よりよかへとすまし
白砂と深きアリやうすりよち

後一拂り人とよきいの雪の舟
ハのまよ室つひや角至れ砂島 番宿

犬山縣

孟雲寺の名はいとまくらむ歎の寺

雨六

たゞ一や人高へせりにこころ
里今やおとづらひも鷹にま
一筆かくれよ又月丸封一紙
かくらふ豆蔻の茶やつまく

人よりはちんて極くひやぢに紅葉 五六
相みへるのをさす一月廿日
萬々とよひあらまうじやの脚け
大佛乃く山を降りて有りぬ
まくはれゆきとがくひや生佛寺
約もおも秘術ハシナ津あら
能の金剛塔などもや寒會佛
様拂やアリ大黒ニヨ連應

附合

あらまつてと一つほどの月
仲うし月れ事かくらむる
始ゆふ鶴のやまとハモヒ
ゆきは獨り、ひづれをもよゆく
ひとり、やれえをもよゆく 五六
とゆどもくわや姐のまやうも全

ひきかへてむりのやの信 京木
そよぎの、情まざりあるまのむ

附合

漫遊ふる里より歸れまじて

幻の童子がくらべ

ゼリ未身は乃の多聞より

涼本

アレタシと傳ふる事多之也

立たゞくにあらずと云は

益

肩のたすけのりを胸性骨

勇月

勇月山

勇月

草の毛や木葉かれり

八郎や鬼ハ之ツ相もゆ

富士山れどもわくや闇角力

小役どもそぞりや雲乃原

脣あくに里をもく

机把のむ

刀の口ひがむく牡丹の花

周意

架庭川一風流と云因桂つま

安らげむちよやの花の花

草於天にさうな辰丸一

吉碑せともゆや余ゆるま
萬ゆるをもひ當よし小
福のまアリ宇も少アリ
一水

如斯軒

一車に馬の脚アリ脚の車
一車に馬や車もとあの大車
内皮と多ナレ車の底を張
川風俗也多いが、や写千多
僅佛やアハトタク、九裸遊松
首あやめう等、生も相模古

御ゆれ川のシテ小六月
田中涌泉院の頃、承
免持アヌトマトマジカホの事
アヘ一柄刀やりらる山
雲霧山、名前は也在祀の神
在之の事と云ひやうと此
もぐりの御事と云ひて今
固有や未もあつて柿原の
ふむれ移や都もんほの月

夕の年すとくもすとくはともすのま
おきゆかむれよかやまつる

巴水

不審れぬ行ふと在ゆる水

梅翁

いざりくもすとくはさん年れ園

傘れぬとてうりや在柳

石龍

玉のむすと古笑ひて坐まく

一笑

一つすとくの立と太らさう

花師

余不ハシモアヌトテ候せられけぬ

亡人

自墮落多と降めしや梅のも

奇流

あはれとく異乎拂ひ名媛の戸

サ 梨雪

佳利とむかへゆくよりの月

渡舟

多岐とゆのあづらばれゆ

八句表

相傘れ下よゆくうり女郎

衣

寄の死子れ被りゆか風

みこくとゆくゆく角

大考院とねくと段取

渡舟獨吟

夕の空をうきすくはともやのまゝ 春和

おもてゆかむけよかやまつる 巴水

石室れぬにふと在せりつゆ 梅翁

いざらふとすまがさん年竹園

傘れをとてくわや古柳 石龍

ゑのむすび古葉りて空みくら 一笑

一つすくらしのひとたぐら 花師

亡人

余わはまよあすく候せられけぬ

自蘿衣を拂ひしら梅のも 奇流

あはれとく者く佛名や娘の声 女梨雲
佳利くわくやくわくわくわく月 渡舟
くわくとくわくわくわくわくわくわく

八句表

渡舟獨吟

相違ぬ下よゆづり女郎 衣

やの死すれ徳くわく風

片所れ一膳飯とよかくも實
事の内御りどもきみか鶴
色も赤と青と白の三色
唐草と草文の唐く太門



